赤松小三郎から見た江戸時代

法政大学名誉教授・江戸東京研究センター特任教授
田中優子

赤松小三郎とは

1831（天保２）信州上田藩（53000石、約100村）、松平伊賀守家中の下級武士、芦田勘兵衛の次男として生まれ、芦田清次郎と称す。

つまり**「藩士」**でした。

赤松小三郎はどう育ったか

・父の勘兵衛は**藩校明倫堂**の教員。

・父の妹、すなわち清次郎の叔母は、上田藩の会計税務も司った**和算家**（数学者）の植村半兵衛重遠に嫁いでいた。

・芦田清次郎（赤松小三郎）は、兄の柔太郎と共に、少年のころから**叔父の植村重遠の塾（私塾）で数学を学んだ。**

江戸時代の学校

- 昌平黌
- 藩校

水戸藩「弘道館」、熊本藩「時習館」
長州藩「明倫館」、紀州藩「学習館」

- 郷学：閑谷学校（岡山藩）
- 私塾：咸宜園、松下村塾、適塾、鈴屋
  藤樹書院、古義堂、蘐園塾、鳴滝塾
- 寺子屋

手習い（寺子屋）

- 1850年頃の江戸での就学率は、70パーセントから86 パーセント。これは、農村部も含めた江戸府内全体。市中で生まれ育てば、裏長屋の子供でも、手習いへ行かない子供はほとんどいなかった。
- 筆子中→農民文人結社、俳諧グループなど、学校以外の教育機関となって継続
- 師匠の身分：武家、浪人、医者、神官、僧侶、山伏などさまざまだったが、庶民が多かった。一般的に、農村部では神官や僧侶、城下町では 武士の師匠が多い傾向があった。

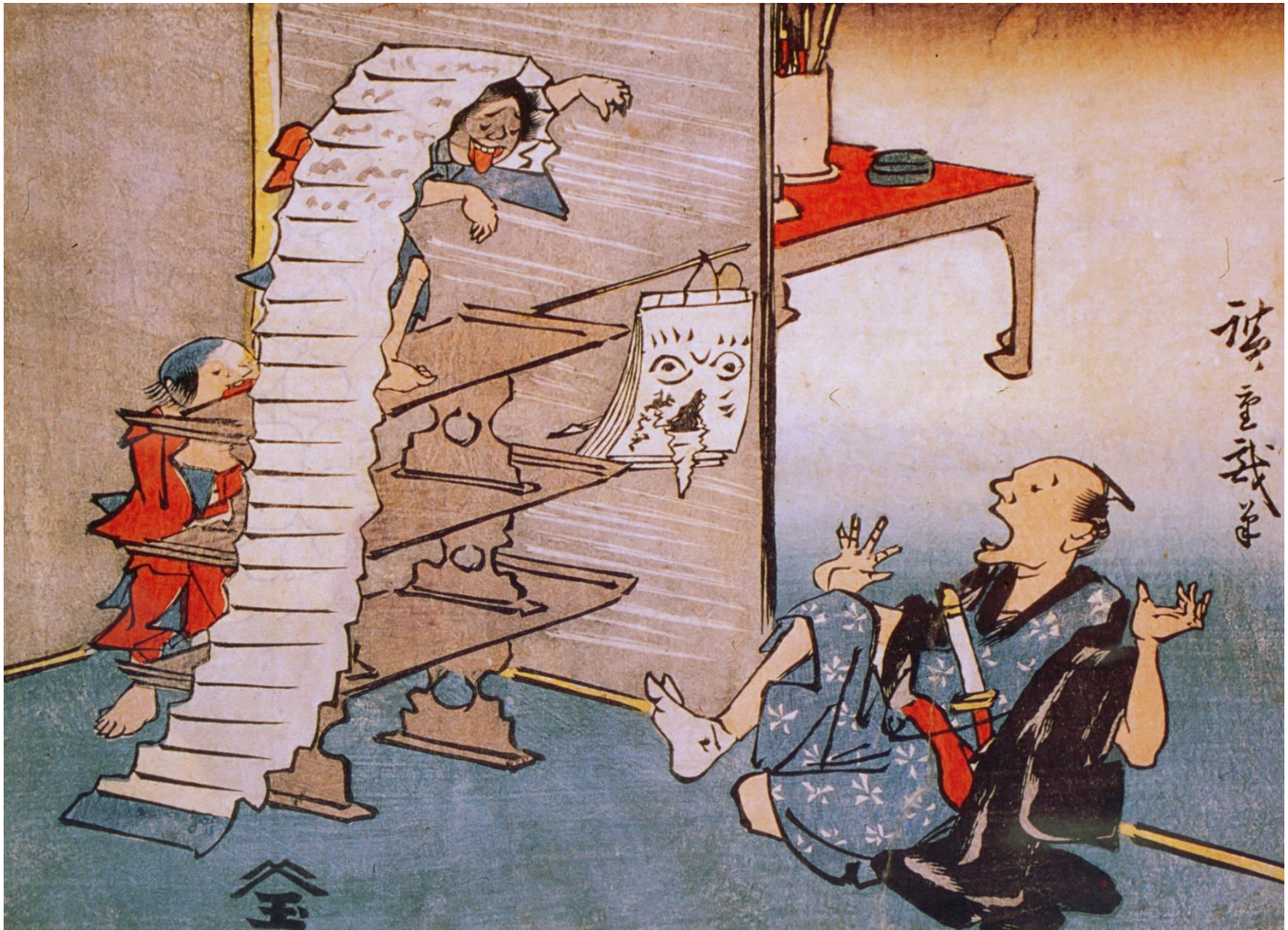
1818年　渡辺崋山『一掃百態・寺子屋』（愛知・田原町蔵）

一八四四から四七年
一寸子花里・文学ばんだいの宝

くもん子供研究所蔵

1780年　下河辺拾水『画本弄』に見える手習所（くもん子供研究所蔵）

1783～1840年　広重『寺子屋遊び』（くもん子供研究所蔵）



教科書

往来物

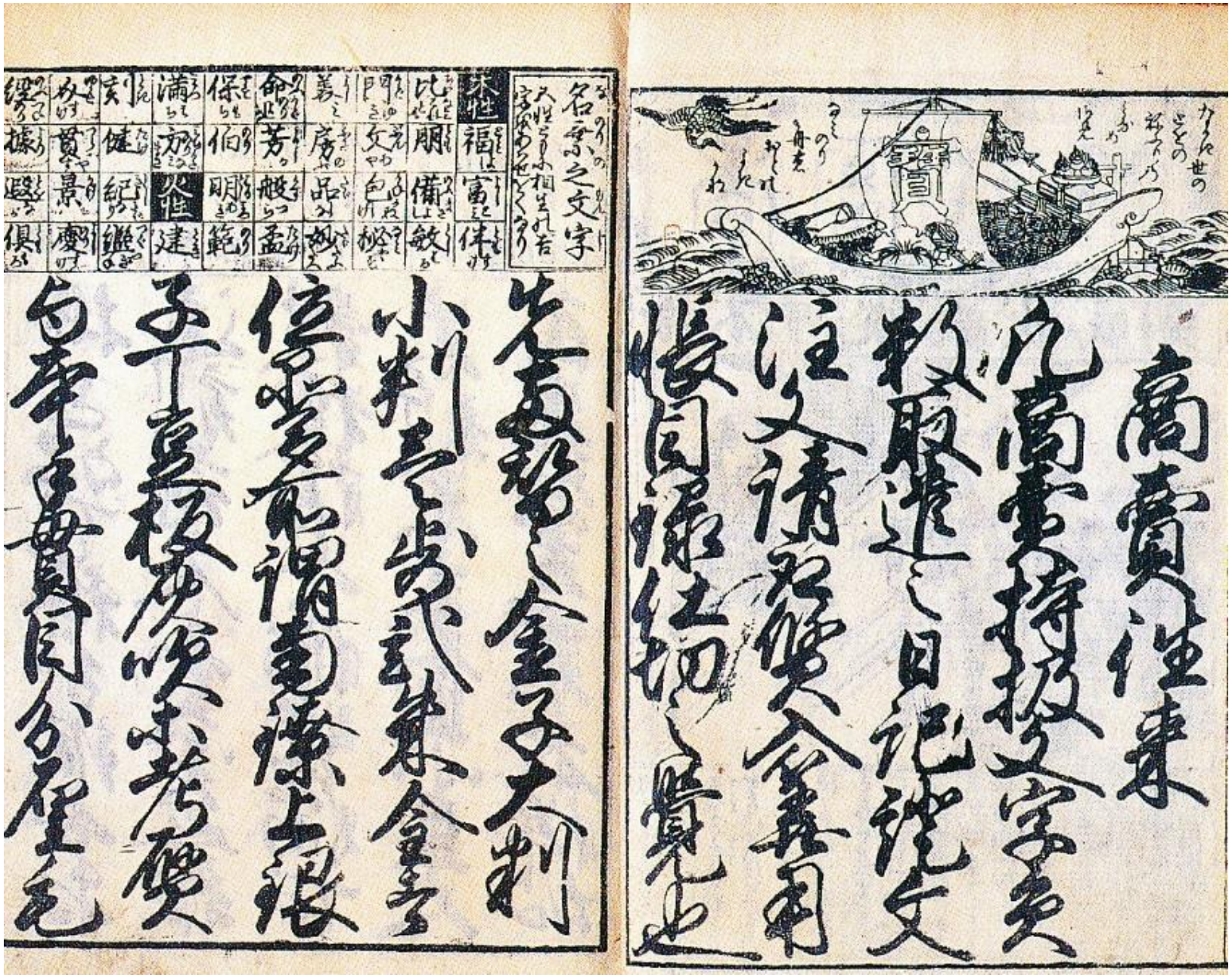
『庭訓往来』『消息往来』『商売往来』
『番匠往来』『百姓往来』『東海道往来』

算術の教科書『塵劫記』

漢文

『三字経』『実語教』『童子教』『孝経』
四書五経

『通宝商売往来』１８１８年



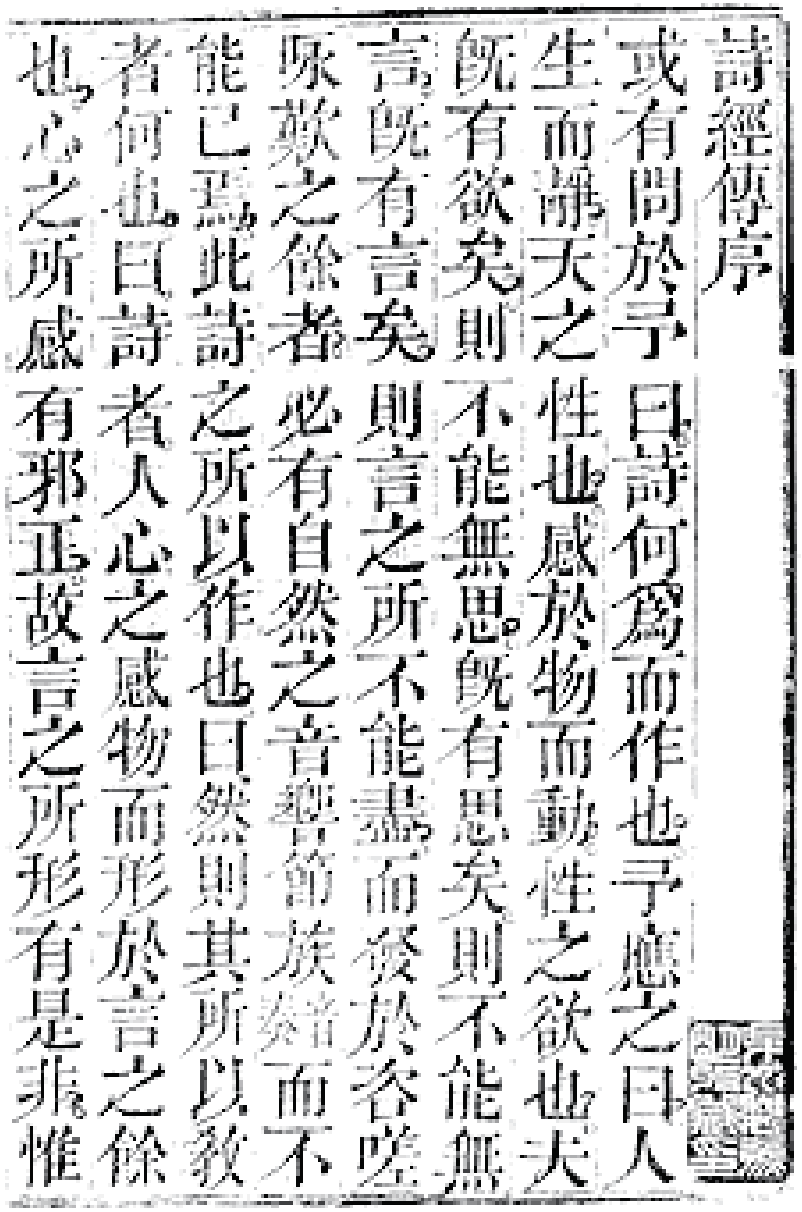
『百姓往来』1811（1766年ごろより70版以上）

相原村（現東京都町田市）の塾

- 円山塾（長福寺）円山登隆、舜牛：文殊堂階段下に弘化５年の天神祠あり
- 小泉塾（相原３６７４：大戸に屋敷跡）
  明治６年に作った筆子中の筆塚あり
- 漢学塾（相原）青木易直
- 塾（相原）島崎伊右衛門
- 塾（円林寺）
- 塾（行昌寺）

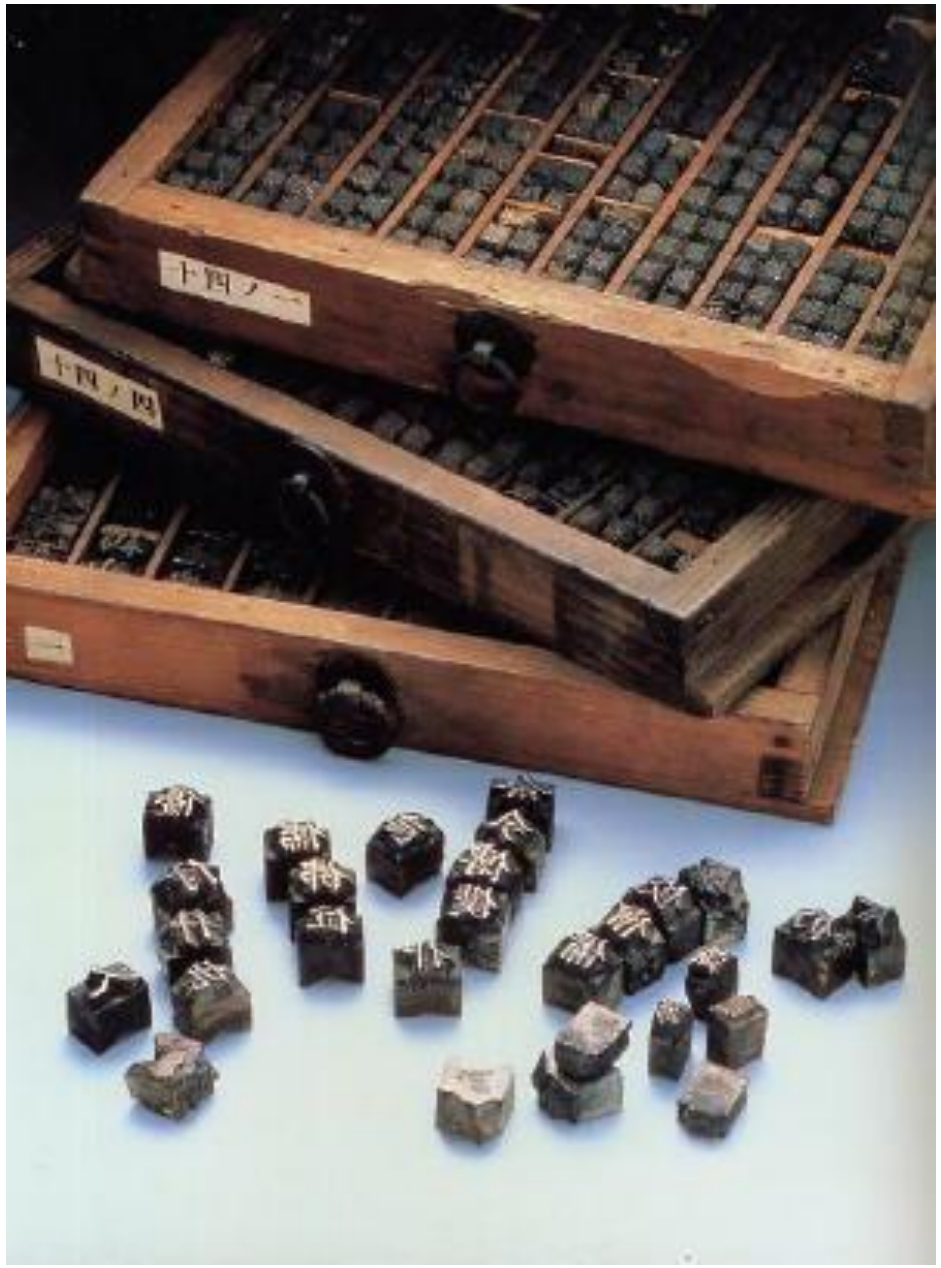
四書五経

詩経



詩經傳序

或有問於予曰詩何爲而作也予應之曰人生而靜天之性也感於物而動性之欲也夫既有欲矣則不能無思既有思矣則不能無言既有言矣則言之所不能盡而發於咨嗟咏歎之餘者必有自然之音響節族焉而不能已焉此詩之所以作也曰然則其所以教者何也曰詩者人心之感物而形於言之餘也心之所感有邪正故言之所形有是非惟



駿河版銅活字1607

慶長勅版・木活字本『勧学文』（１５９７）

勸學文

真宗皇帝勸學

富家不用買良田　書中自有千鍾粟
安居不用架高堂　書中自有黄金屋
出門莫恨無人隨　書中車馬多如簇
娶妻莫恨無良媒　書中有女顔如玉
男兒欲遂平生志　六經勤向窓前讀

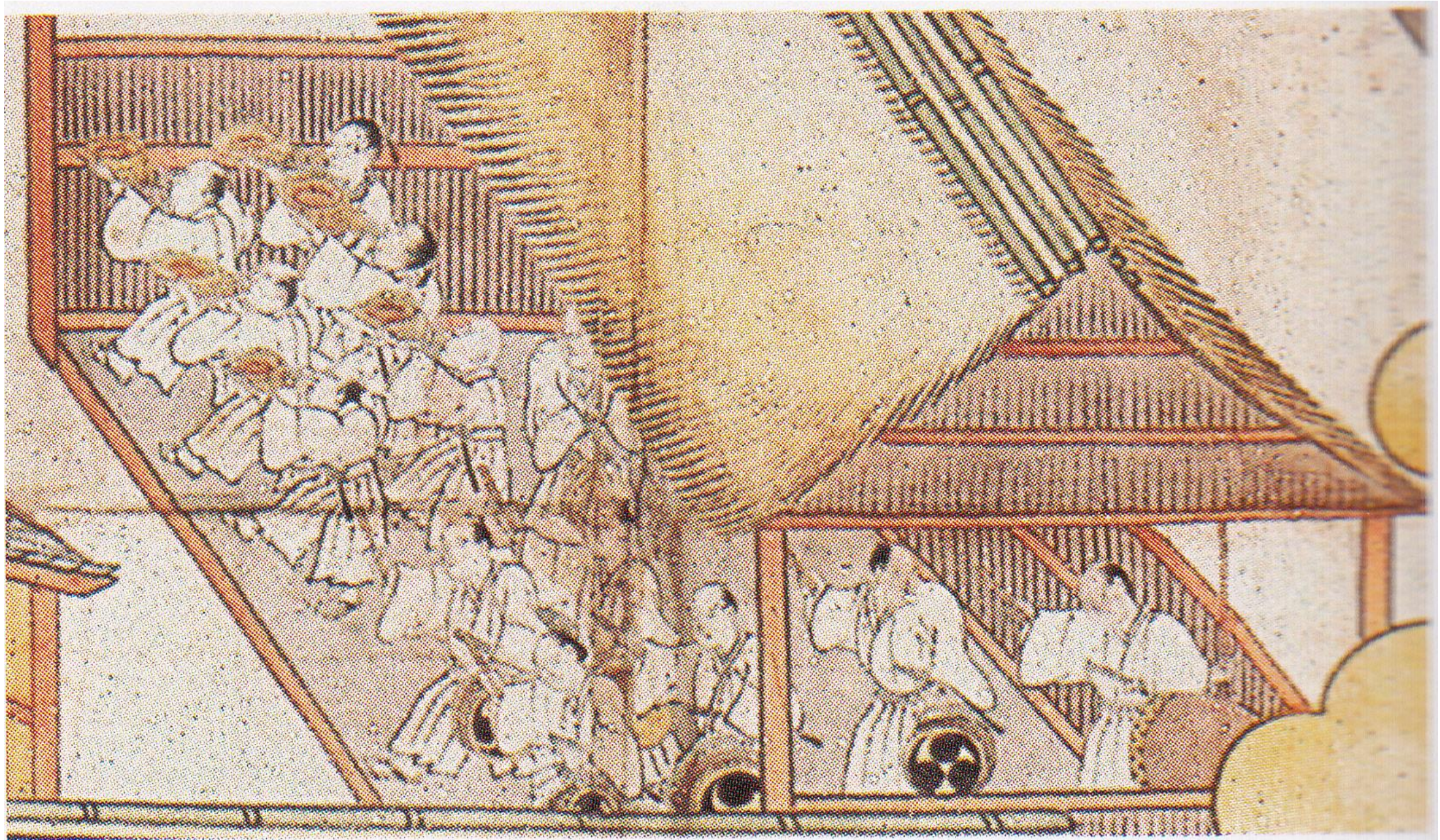
仁宗皇帝勸學

爲爾惜居諸　恩義有相奪　作詩勸躊躇

命工每一梓鏤一字棊布之一版印之
此法出朝鮮甚無不便因茲摸寫此書

慶長二年八月下澣

豊後府内藩の藩校「游焉館」歌舞の稽古



豊後府内藩の藩校「游焉館」剣術

豊後府内藩の藩校「游焉館」砲術

江戸時代の人々の学び方

①素読課程、自読課程

②講義課程

・聴講学習：月並講釈、日講、講授（個別）

・独看質問：読書して質問

③会業：会読・輪講。数名から10名のグループを作って協同学習する方法。

課書＝テキスト

四書：『大学』『論語』『孟子』『中庸』（『孝経』『大学』の順もある）。次に五経『易経』『書経』『詩経』『礼記』『春秋』

江戸時代の人々の学び方：素読

・そどく、すよみ、そよみ。
句読（くとう）、誦 読（しょうどく）ともいう。

・7、8歳からおこなう。
12、3歳で『易経』『詩経』『書経』『春秋』を卒業。
14歳で『礼記』を卒業。

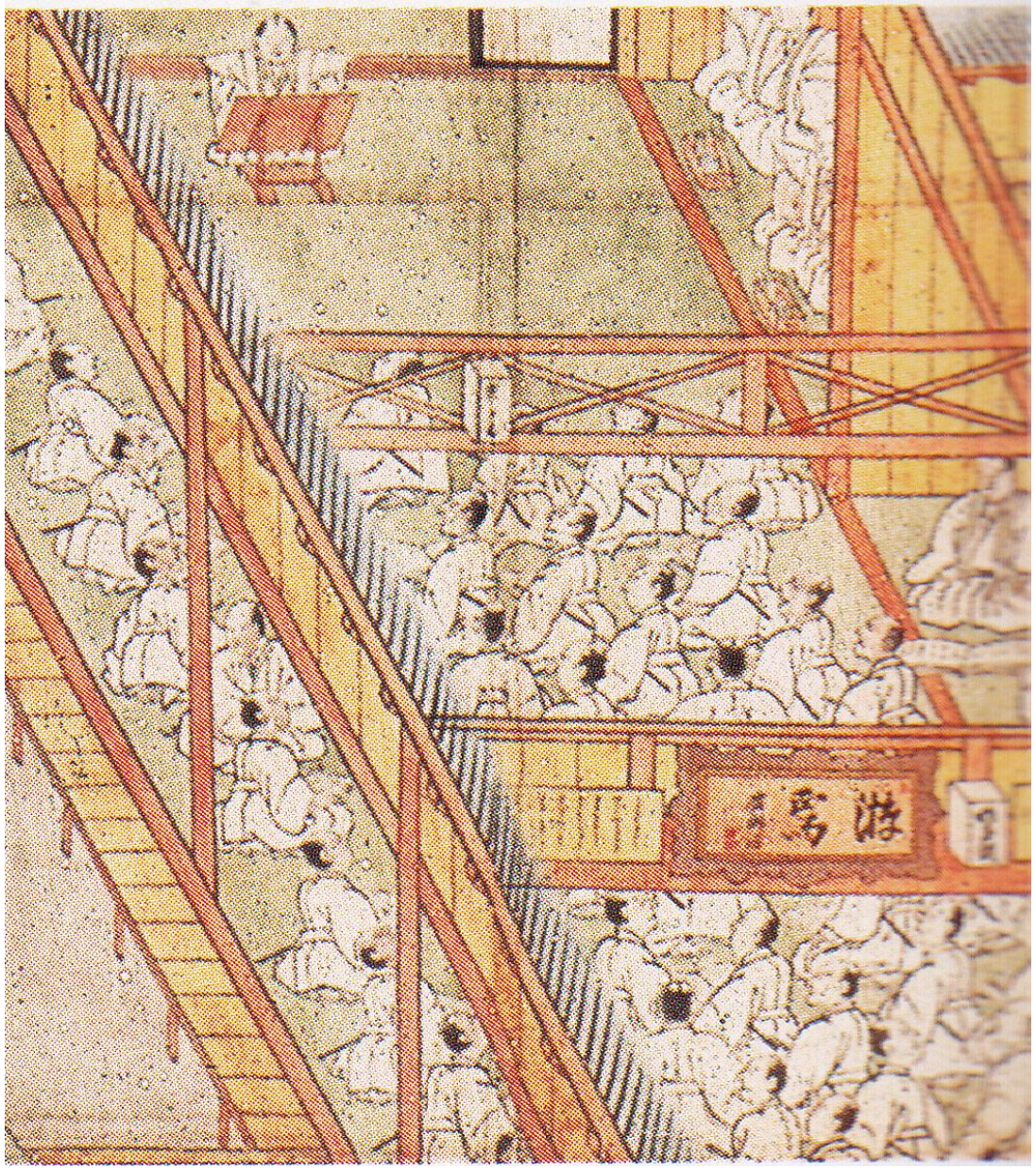
・字突棒で文字を指しながら声に出して読み、子供がそれを復唱する。
音読により、身体で覚える。大意も授けられる。
・授読、素読口授：読み方の教授法の名称。
・つけ読み：字突棒で指して口移しで読ますこと。
・復読：自分で読んで覚えること。
・自読：教師の前に出て、独り読みして正誤を受ける。

江戸時代の人々の学び方：講義

聴講、聴聞とも言う
1章から2、3章の字の意味、文の意味を和解

- **講釈（月並講釈、日講）**
- **講授（個別講釈）**
- **返講、復講：学ぶ側が講義すること**
- **独看、質問：ひとりで考え、あるいは質問すること**

豊後府内藩の藩校「游焉館」
儒学講義



江戸時代の人々の学び方：会業

会業＝会集してなす学業。協同学習。

・輪講　・会読

討論による相互コミュニケーション性、対等性、結社性

10人ぐらいで1グループとなり、順番をくじで決め、テキストの当該箇所を読んで講義する。他の者が質問し、討論する。教師は、議論が対立したりすると判定を下す。

江戸時代の藩とは？

- 将軍より1万石以上の領地を与えられた大名の所領および組織のこと。江戸時代に１度でも存在した藩は５００藩近くなる。
- 初期には２００足らず、１８６５年には２６６藩。
- １６６４年の事例では５０万石以上が６藩（２、７％）で、５万石未満の藩が６０％近くを占める。多くは城を持たなかった。

- 一般的には国元と江戸とに二分され、国元には家老が置かれ、その下に用人、寺社奉行、町奉行、勘定奉行、郡奉行、そして代官が置かれた。

- 多くの藩で参勤交代、江戸入用の増大、年貢収納高の減少、米価安などで財政は悪化し、商人から多大の借財をし、年貢収納を高くしてしのいだ。産業や藩専売制を行うなどして領内の物産の振興につとめその商業的利潤をも得ようとしたが、すべての藩で成功したわけではない。

幕末の動き

1840-42　アヘン戦争

1845　阿部正弘が主宰する海岸防禦掛が新設される。

1846　イギリス船、フランス軍艦が琉球に。米国ビッドルが率いる軍艦コロムバス、ヴィンセンス２隻が浦賀沖に。この年の捕鯨船736隻。フランス軍艦長崎に来る。

1849　佐久間象山が松代藩主宛に、中国のアヘン戦争敗北の原因は学問と実際の不一致であること、オランダ語辞書を刊行して、多くの人がヨーロッパのことを知る必要があることを意見提出。

1852　オランダ商館は「風説書」でペリー来航を知らせるが幕府は無視。

1853　ペリーが２隻の蒸気船と２隻の帆船で浦賀に入港。ロシアのプチャーチンが長崎に入港。

勝海舟が阿部正弘の海防意見書募集に応じて意見を提出。

1854　ペリーが横浜の小柴へ再来航。日米和親条約、日英和新条約、日露和親条約。**吉田松陰**が国防憂慮による渡航の企て

1855　長崎海軍伝習所設置。日蘭和新条約。

1856　ハリスが下田に着任し、大統領親書を将軍に提出。

1858　勅許を得られないまま日米、日蘭・日露・日英・日仏修好通商条約調印。安政の大獄はじまる。

幕末の幕府と藩

赤松小三郎が生まれ育ったころ、上田藩主は松平忠固（ただかた）＝忠優（ただます）。1830年藩主となる～59年死去。

・1834年　幕府奏者番（将軍と大名の取次役）就任。水野忠邦の蘭学者弾圧を批判。

・1848ー55年　幕府老中。上田で大砲を鋳造し、ペリー再来航の54年に江戸藩邸で実弾演習。ペリーの開国要求に際し、意見聴取に反対。攘夷論を唱える水戸藩主・徳川斉昭の海防参与就任にも反対。積極的な交易論を主張し、阿部正弘によって罷免される。

・1857ー58年　老中再任。老中次座。日米修好通商条約締結につき、勅許不要論を唱える。朝廷の勅許にこだわっていた堀田正睦と井伊直弼と異なり、条約の調印を決断する。条約の調印から4日後、忠固は正睦と共に老中を免職、蟄居を命じられた。安政の大獄の始まりであった。

幕末の幕府と藩

赤松小三郎活躍期の上田藩主は松平忠礼（ただなり）

1859年藩主となる。95年死去。最後の藩主。

・赤松小三郎が1861-64 上田藩において「調練調方御用掛」「砲銃道具製作御掛」などの公務につき、兵制の洋式化に努めた時の藩主。

・1866年9月に赤松小三郎が建白書を提出。

・1868年　明治政府側として戊辰戦争に合流。

・1869年　上田藩知事。1871年免職。

・1872年　米国ラトガース大学に留学

・1880年～　外務省御用掛として都市調局に勤務。子爵。

・1854 年（安政元）赤松小三郎（満23歳）は勝海舟の門人となり、翌年、勝の従者として、同年に創設された公儀の長崎海軍伝習所に赴く。正規の伝習生ではなく、勝の従者の「員外聴講生」という身分であった。

・長崎海軍伝習所では、航海術、測量術、オランダ式兵学などを学んだ。

・オランダの兵学書『新銃射放論』『選馬説』『矢ごろのかね　小銃設率』を翻訳する。

・1861-64 上田藩において「調練調方御用掛」「砲銃道具製作御掛」などの公務につき、兵制の洋式化に努めた。

・1866年（慶応2） 3月『英国歩兵練法』全五編八冊完訳。

・8月、徳川政権へ、公儀による第二次長州征伐の決断を批判した上で、その敗北を教訓に、身分制度にとらわれない人材登用を行なうよう訴えた。

・9月、上田藩主の松平忠礼へ建白書を提出。

赤松小三郎の講義内容

先生は常に輿論政治を主張して居られた「如何に賢明なる人とても神でない限り思ひ違い、考へ違ひがある。又少数の人が事を行ふ場合、感情、誤解、憎悪が附随するから失態がある。是非これは**多数政治によらねばならぬ——**。」先生は丁度今日の議会政治を主張しました。それは未だ開国するとかせぬとかかまびすしい時でしたから驚きました。（中略）

「外国の亡国の例を見るに、皆此の身分や階級の為、人材を野に棄て、貴族と称する輩が自己の無能を顧みずして専横を振舞ふたにある。（中略）**多数の選挙によって選んだものを宰相とするのである。**英国式を参考として日本の国柄に合はせるがよい。」常に先生はかく説かれてゐた。

1867（慶応3）赤松小三郎が
普通選挙による議会制民主主義を提案

・赤松は選挙のことを**「入札」**と表現している。江戸時代、村などの共同体では話し合いで決着がつかない場合選挙をおこなうことがあり、それを「入札」と言っていた。

・しかしここで提案されているのは、**日本という単位における選挙**である。その選挙で選ばれる議員は諸地域から数人ずつ合計130人、さらに30人を公家、諸侯、旗本から選挙する構想であった。

・「国中之人民平等ニ御撫育相成、人々其性（さが）ニ準て充分を尽させ候事」「漸々諸学校を増し、国中之人民を文明ニ育候儀、治国之基礎」

・談論によって合意形成する江戸時代の地方行政や権力を分散する方法などが欧州の政治と出会ったとき、自発的に生まれた発想である。

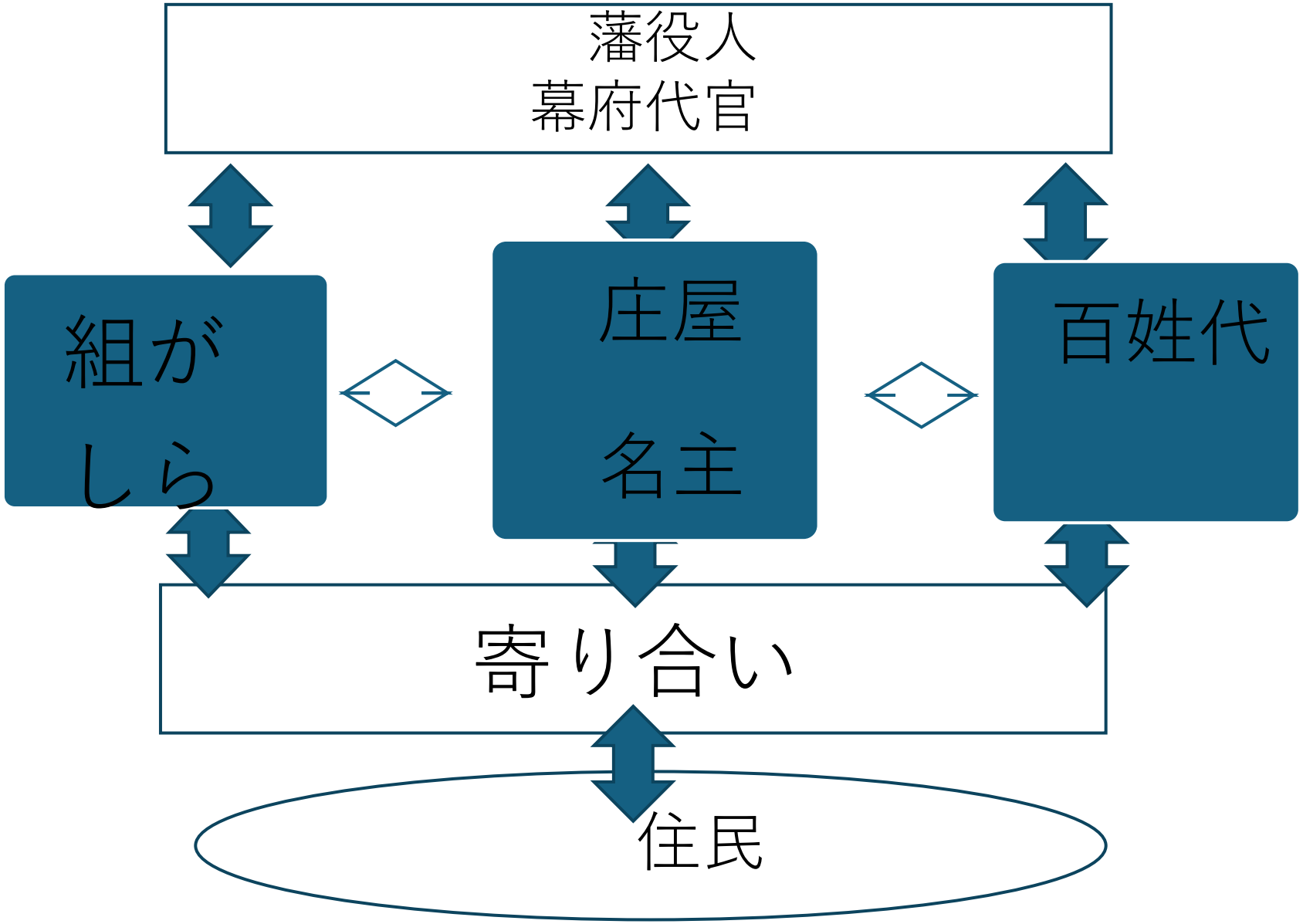
江戸時代の村の
合議と一揆

制度の村

・ひとりの代官（幕府と諸藩の農民支配を担当した民政担当地方官）は２０～３０人の部下（武士階級の手附と農民の手代）を持ち、時にはひとりで５万石～十数万石を担当した。

・村ごとにいた「村方三役」は、代官から村人への触れの伝達や、村人の意見の集約と代官への伝達をおこなった。代官の役割は年貢の徴収であり、それ以外の生活にまで踏み込むことはなかった。

地方の自治組織



生活の村

・村の決定機関は「寄合（議会）」であり、**寄合は合議に至るまで徹底的に話し合う機関であったが、幕末には入札（選挙）が導入されるようになる。**

・**寄合は各家より1人ずつ世帯主の出席によって開催**されたが、重要議案の時には全員が集まることもあった。

・**寄合のために「会所・会議所」と呼ばれる施設が設けられていた。**地方によって、神社境内の「庁屋」や「寮(仏堂)」がある。また寺の本堂が使用されることも少なくなかった。

・村には、年齢や性別や機能によって「組」「衆」「講」「結」「座」が存在した。

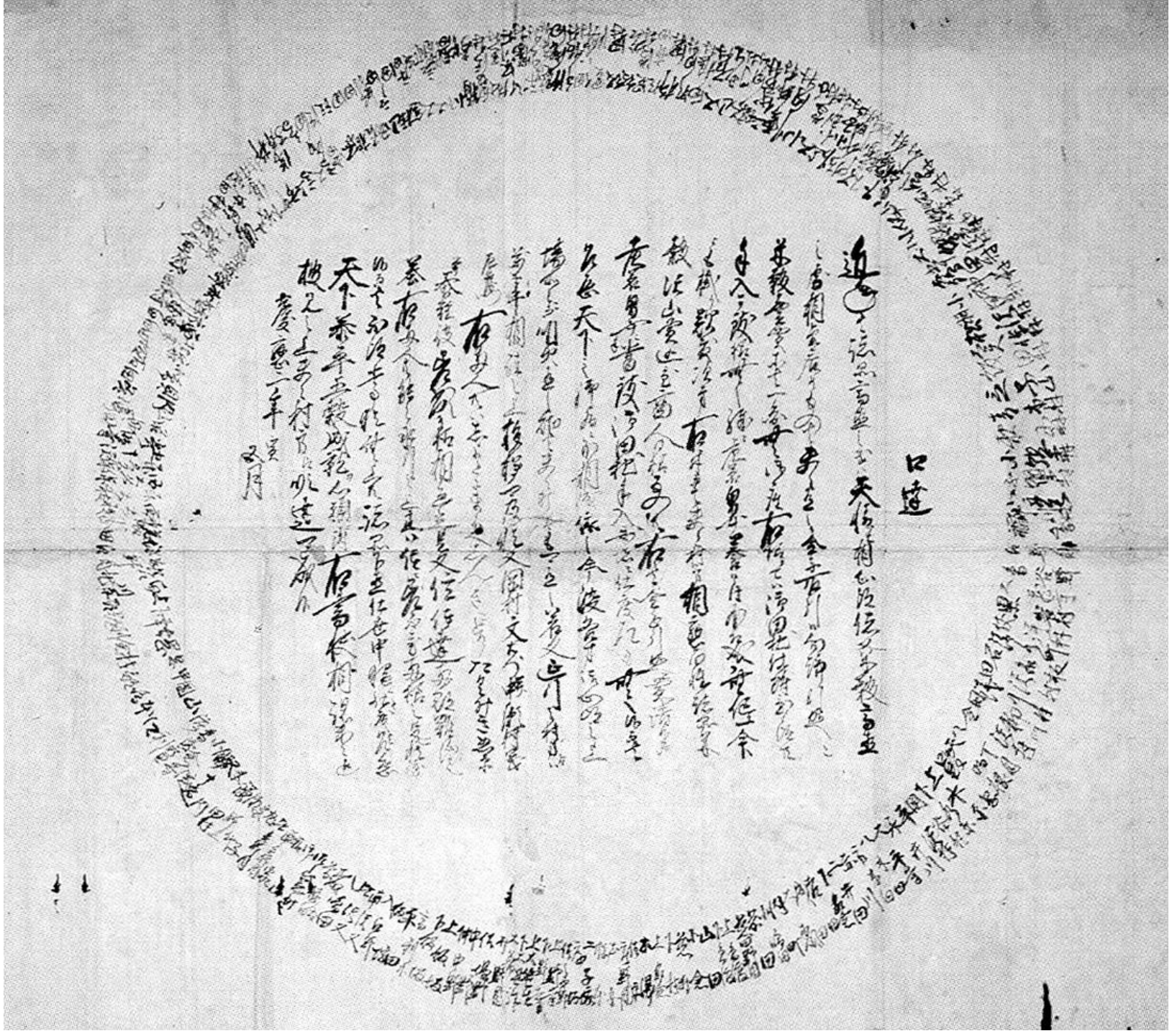
一揆の手順

①徒党を組み、契約文言、起請文を作り、署名する（傘連判、車連判）。この段階を「一揆」という。

②愁訴（しゅうそ）：窮状を訴えること。要求事項を記載した「百姓申状（もうしじょう）」を読み上げ、渡す。

③越訴（おっそ）：訴訟の手続きの段階を飛び越しておこなう訴え。百姓の意向を負って、村役人が単独もしくは少数で直訴することが多い。

④呼びかけ：頭取（首謀者）のいる村を「発頭村（ほっとうむら）」として廻状（かいじょう）を作る。廻状には一揆の目的、日時、年令範囲（ほとんどの場合１５～６０歳）、廻す方法、違反者への罰則が書かれる。



一揆の手順

⑤強訴（ごうそ）：愁訴または越訴が受け容れられなかった場合、要求する相手に集団で直訴すること。この際に打毀(うちこわし)がおこなわれることがある。

⑥一揆当日：蓑笠をユニフォームとする。篝火をつけ、たいまつを持ち、鐘や半鐘が鳴らされ、ほら貝が吹かれ、ときの声を上げ、出動をうながす。

⑦逃散（ちょうさん）：愁訴、越訴、強訴いずれも受け容れられなかった場合、百姓たちが田畑を捨て、山林に入ったり、他の土地に集団で移住すること。

2024年11月4日赤松小三郎研究会
講演会シンポジウム

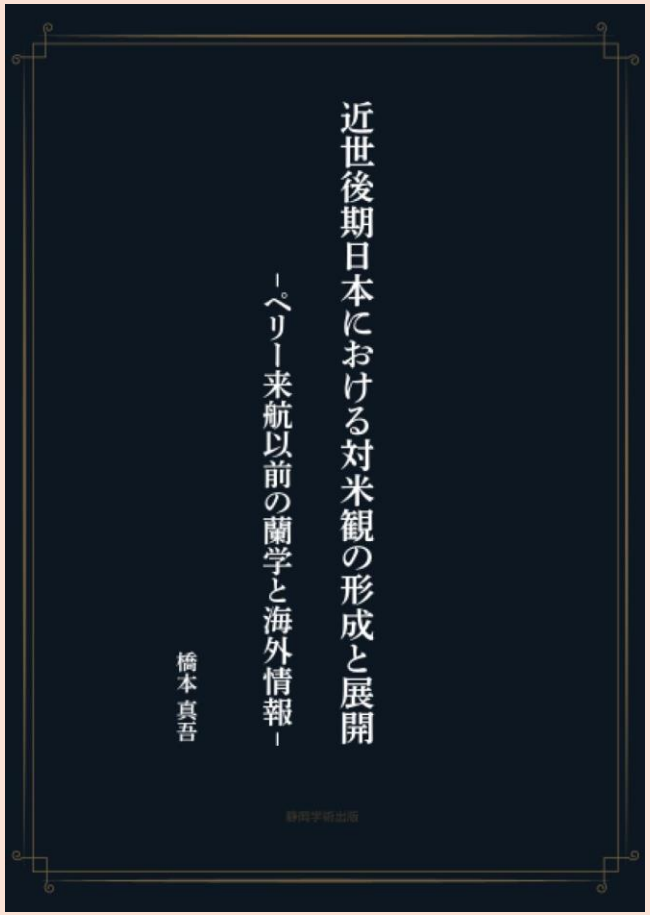
江戸時代の日本人が知った民主主義と議会政治

ーオランダ地理書の翻訳とアメリカ理解ー

パネリスト

北里大学・一般教育部

橋本　真吾



静岡学術出版、2024年

徳川日本における議会政治と「**共和**」概念の影響

アメリカの影響と「**共和**」概念

1. 蘭学を通じて徳川日本に伝えられた、**議会政治**や**民主政治**に関する最初期の知識
2. 嘉永6（1853）年のペリー来航前から、「**共和政治州**」というアメリカ合衆国の国名とともに「**共和**」の概念が伝わっていた
3. 蘭学者による**翻訳**と**独自の解釈**で、東アジアに新たな概念が創出された
4. 近代以降の「**共和国**」など現代政治用語への影響

総括：「**共和**」概念は江戸後期における**西洋思想の受容に重要な役割を果たし**、**近代日本の政治概念にも影響を与えた**

「共和」「共和政治」その起源とは

◆箕作省吾（津山藩）『坤輿図識』（弘化2[1845]年刊）

【日本語】**共和政治州**總説（フルヱーニフデスターテン）

… 國主酋長有ルニ非ズ、毎國、其賢者數人ヲ推テ政官トナス

【オランダ語】Regeringsvorm（「政体」について）

De vereenigde staten hebben eene ***volksregering***.
De enkele staten hebben hun afzonderlijk bestuur en wetten, maar zijn door ***het congres***, **bestaande uit afgezondenen van alle staten, te zamen vereenigd**.（『プリンセン地理学教書』4版）

***volksregering*〔民衆政治〕**

※”republic”ではない

早稲田大学図書館所蔵
（請求記号：ル02_01104）

オランダから日本へ伝わった議会政治の知識（1）

18世紀後半～19世紀初頭（～1830）

ヨーロッパ（イギリス）の議会政治についての説明

- **朽木昌綱（福知山藩主）『泰西輿地全図』（寛政元[1789]年）**
  - 「〔ウエストミンステル〕…古ハコレモ王ノ居処ナリシガ、今ハ**会儀堂**トナリテハ、国中ノ諸役人集リテ政事ヲ儀スルノ役所…」
- **吉尾忠次郎（阿蘭陀通詞）『諳厄利亜人性情志』（文政8[1825]年）**
  - 「**大会**」、「大事ある時**国中の人集りて評決する会**を云」
- **青地林宗（蘭学者）『輿地誌略』（c. 文政11[1828]年）**
  - 「政府を把尓列孟多（パルレメント）と謂、**政臣会集の庁**なり上下二庁に分つ」

  *仏にも”***Parlement***”の記述あり

◆主な典拠は**J. Hübner『一般地理書』(1769)**

オランダから日本へ伝わった議会政治の知識（2）

19世紀中期（1831～）～アヘン戦争前後

各国の政体／アメリカ合衆国についての説明

➢**小関三英『新撰地誌』（天保7[1836]年）**

〔三種の政体〕

ヲンベパールデ・モナルカール〈他國の命を受けず独立して國民を治るをいふ〉とベパールデ・モナルカール〈他國の命を承るを云〉、レピュブリケインスまたゲメー子ベストゲシンド〈**國の豪傑相議して治る**を云〉

〔二種の共和政体〕

其一ハ國中年長の人を建て會主となし以て命を受る所とす、是を「アリスト・カラチス」と名ツく、其一は**材智兼徳の人を撰テ會主とす**是を「**デモクラチス**」と名ツく

〔アメリカ〕

「フルエーニグデ・スターテン」〈**集合諸治の義**〉

◆典拠は**P.J. Prinsen『地理学教本』（第2版 1817）**

オランダから日本へ伝わった議会政治の知識（3）

19世紀中期（1831～）～アヘン戦争前

アメリカ合衆国についての説明

- **高野長英／渡辺崋山『外国事情書』（1839[天保10]年）**

〔アメリカ〕

北亜墨利加ノ内ニ、「レビュフレーキ」、又名ハ「フルヱーニグテスターデン」ト称シ候国有之、（中略）**土人相談**仕、別ニ君長ヲ相立不申、**賢才ヲ推テ官長ト致シ、百官ヲ設フケ**、**会議共治**仕候。「フルヱーニグテスターデン」ト申ハ、即コノ義ニ御座候。

＊「会議」には「**サウタン**」（相談）、「共治」には「**トモニオサメル**」ルビ有

〔イギリス〕

政事ノ次第ハ諸地志ノ書法一定不仕候共、大抵君臣権ヲ分チ、議ヲ合シ相治メ候由。**政府上下ニ相分チ、上庁ハ教官ノ議廷、下庁ハ世族ノ議廷**ニ御座候由。

小括：徳川日本における議会政治の知識の変遷

18世紀後半～19世紀初頭（～1830）		“parlement”
朽木昌綱	『泰西輿地全図』（1789）	会儀堂
吉尾忠次郎	『諳厄利亜人性情志』（1825）	大会
青地林宗	『輿地誌略』（c. 1828）	政臣会集の庁

19世紀中期（1831～）～アヘン戦争前		“republiek”
小関三英	『新撰地誌』（1836）	國の豪傑相議して治る
高野長英・渡辺崋山	『海外事情書』（1839）	会議共治

アヘン戦争後（1842～）～ペリー来航		“volksregering”
箕作省吾	『坤輿図識』（1845）	共和政治

← 議会政治の知識 ←

明治期における『共和』概念の**タブー化**の歴史

1868-

- **福沢諭吉『西洋事情』**
  - 「共和政治は私心によらない政治」「アメリカはその最たる例」

1875-

- **言論統制**
  - 立憲政體樹立の詔、明六社解散など
- **政体変革陰謀事件**
  - 「御政体ヲ共和政治ニ変革企ル」と主張し、福沢らが暗殺の対象に

1899-

- **<u>尾崎行雄「共和演説事件」</u>**
  - 尾崎は、拝金的風潮を批判し、「道徳がなければ立憲政治も共和政治も成立しない」と発言し、各メディアから批判され、大臣辞任に追い込まれる。

参考：
拙稿「明治期の「共和」言説と言論弾圧ー「五箇条の誓文」から「共和演説」まで」岩下哲典ほか『東アジアの弾圧・抑圧を考える 19世紀から現代まで　日本・中国・台湾』（春風社、2019年）

まとめにかえて

立憲制・議会民主制以前の日本の知識

- 蘭学者たちの**議会政治**への関心は着実に進展していた
  - 1810年代からオランダでも地理学が急速に普及する
  - 人文社会知に関する西洋文明論輸入のさきがけとなった
- **身分制の廃止**や**代表制**といった観点で、アメリカの民衆政治（*volksregering*）の訳語であった「**共和政治**」が普及した
  - 明治期に入って**タブー化**されたことは**歴史のアイロニー**

考えるヒント：「**共和**」概念の普及の背景として

- 幕藩体制がアメリカの政治体制（**連邦制**）と類似していたから
  （青山忠正『明治維新』（吉川弘文館、2012年）187-188頁）

2024年11月4日

赤松小三郎研究会

赤松小三郎と江戸
からの民主主義の可能性

関　良基（拓殖大学政経学部教授／
赤松小三郎研究会）

明治維新史の「定説」

遠山茂樹（昭和26年）「イギリス・フランスの外交官の指導」により、「議会制度が次第に新しい政治理念として浮かびあがってきた。・・・・蘭書および中国書によって輸入紹介された欧米の議会制度の外形だけの知識によって、・・・分解せんとする封建政治機構の補強救済策としての列藩会議論に定着していった。・・・議会制度論は、もっぱら封建支配者間の対立を緩和し、封建支配秩序を再建する手段として、受け取られたのである」
（遠山茂樹 『明治維新』岩波文庫）

幕末を生きた渋沢栄一の認識

渋沢栄一（大正6年）（横井小楠や赤松小三郎らの議会政治思想を紹介）「気運の然らしむる所、欧洲思想の模倣とのみは言ふ能はざるなり」
（渋沢栄一編『徳川慶喜公伝（4）』平凡社東洋文庫）

赤松小三郎は慶応3年5月、日本で初めて法の下の平等と普通選挙を提案した

□此両局〔上下両院〕にて総て国事を議し、決議

👉国権の最高機関としての議会（憲法41条）

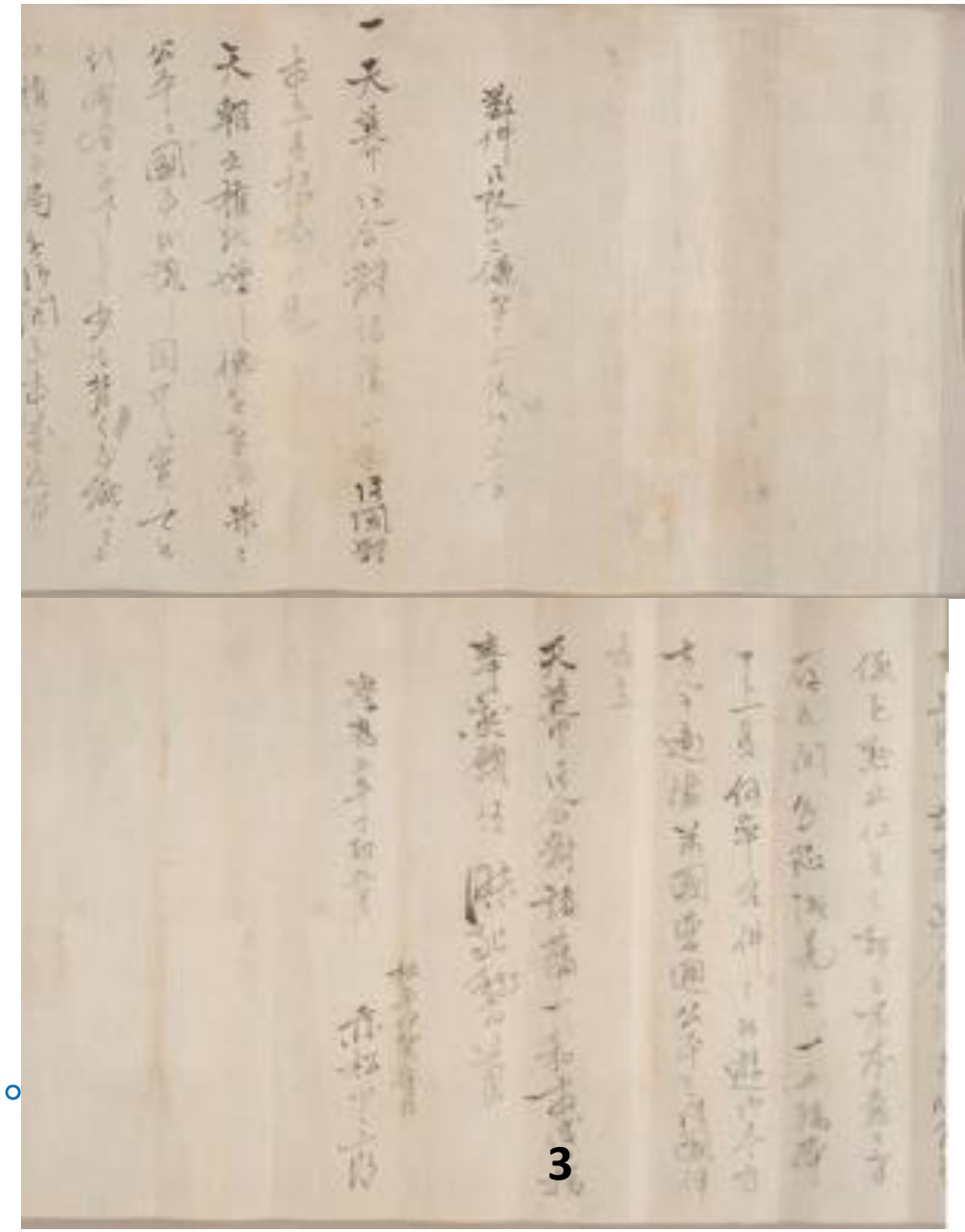
□〔議員の〕人撰之法は、門閥貴賤に拘らす、道理を明弁し、私無く且人望之帰する人を公平に撰むへし・・・・・・数人づつ道理の明なる人を自国および隣国之入札にて撰抽

👉身分・財産に関係なく「入札」で議員を選出。

普通選挙。（憲法44条）

□国中の人民平等に御撫育相成、人々その性に準て充分を尽くさせ候事　・・・諸学校を増し、国中の人民を文明に育み候儀、治国の基礎

👉すべての国民は平等であって、その個性は尊重され、やりたい仕事ができる。国家は教育によってそれをサポートすべき。（憲法13、14、22、26条）



土佐の大政奉還建白書は赤松建白書を参考にしていた？

「大政奉還建白書」の主な内容

① 行政府としての朝廷、立法府としての議事院設立。
② 学校を設立し教育振興
③ 上院議員は公卿・諸侯、下院議員は藩士・庶民に至るまで正義の者を選挙。
④ 国軍の創設
⑤ 外国と新しい条約を締結して通商を行う。
⑥ 古来の律令の弊害を除き、地球上に恥じない憲法を制定。
⑦ 官吏・議員は公平無私を貫く人材を抜擢。

「大政奉還建白書」と赤松建白書の共通項　①②③④⑥⑦

リクルート

神田孝平
慶応４年 「江戸市中改革仕方案」

津田真道
慶応３年　日本国総制度

加藤弘之　文久２年「鄰草」
慶応４年「立憲政体略」

山内容堂：　幕末から憲法制定と議会開設を模索し、土佐藩として政権返上を建白。
維新後、議事体裁取調所総裁。

加藤弘之の人権論は西洋思想の受け売りではない

加藤弘之が掲げた「国憲」に書き込まれるべき最低限の基本的人権

①「生活の権利」　生存権（現行憲法の25条）→　死刑廃止も訴える。
②「自身自主の権利」　正当な理由なしに逮捕・拘禁されない（憲法34条）
③「行事自在の権利」 職業選択の自由（憲法22条）
④「結社及ひ会合の権利」 集会・結社の自由（憲法21条）
⑤「思、言、書、自在の権利」 思想・言論・出版・表現の自由（憲法19条）
⑥「信法自在の権利」 信教の自由（憲法20条）
⑦「万民同一の権利」 法の下の平等（憲法14条）
⑧「各民所有の物を自在に処置する権利」 財産権（憲法29条）

神田孝平「江戸市中改革仕方案」
『中外新聞』 慶応4年4月27日

- 「江戸中の知恵と力を集むる」ため「総代会議の法を設くる」
- 江戸市中を20組ほどに分け、各組2名を「入札」で選出。
  総代の任期は4～5年。
  → 江戸中から選ばれた45人ほどで「総代会議所」を設立。
- 選挙権は「地面持」
  「入札の法にて誠実才能ある者二人を選み」
  被選挙権は「地面持」に限らず「誠実才能」あれば誰でも。
- 地面の主たる者己が地面を大切に思わざるはなし
  「総代打ち寄りて評議決着せば自然に江戸中を大切に思ふ心を生す」

● 神田は明治4年に兵庫県令となり、「民会」を設置。
町村会（元来の共同体の寄合） → 区会 → 県会
👉 下位上達のボトムアップ型の県政を実現しようとした。

パネルディスカッションでの討議課題

① 赤松小三郎ら江戸末の議会政治論／憲法構想をどのように評価するか？

② 江戸の伝統的な寄り合い自治と、欧米の議会政治論・共和（＝民主）思想は融合し、日本型の民主主義を生み出す可能性はあったのか？

③ 歴史学者が江戸末の議会政治思想を「欧米の知識の受け売り」あるいは「封建議会論」などと規定し、真剣に検討しようとしなかったのは何故なのか？

④ 儒教は封建教学で近代を生み出さなかったというのは本当なのか？

赤松小三郎略年譜

（赤松小三郎研究会）

元号	西暦	年齢	赤松小三郎の事績	日本の動き
天保２	１８３１	１	４月、信州上田藩士芦田勘兵衛の次男として誕生。（幼名清次郎　兄は柔太郎）	
天保８	１８３７	７	幼少より、叔母の夫植村重遠に算数を学ぶ。	
天保１３	１８４２	１２		（８月、アヘン戦争で清国惨敗）
天保１４	１８４３	１３	藩校に入学し、漢籍と武技を学ぶ。	
嘉永元	１８４８	１８	江戸に出て、数学者内田弥太郎のマテマテカ塾に入り、算数、天文、測量、暦学、地理、蘭学等を学ぶ。	
嘉永２	１８４９	１９		１０月、上田藩主松平忠優、老中に就任。
嘉永５	１８５２	２２	西洋兵学者の下曽根信敦塾に入り、蘭学、砲術等を学ぶ。	
嘉永６	１８５３	２３		６月、米国ペリー艦隊浦賀に来航
嘉永７	１８５４	２４	春、上田藩士赤松弘の養子となる。 夏、勝海舟に入門する。	３月、日米和親条約締結。
安政２	１８５５	２５	１０月、勝海舟の内侍（従者）として、長崎海軍伝習所に入所し、蘭学、兵学、航海術等を学ぶ（安政６年４月頃まで）。	８月、松平忠優、老中を罷免される。
安政４	１８５７	２７	７月、オランダの兵書「新銃射放論」を翻訳。	９月、松平忠固（忠優を改名）、老中に再任される。
安政５	１８５８	２８	オランダの兵書「矢ごろのかね　小銃彀率」を翻訳・出版。	４月、井伊直弼、大老に就任。 ６月、日米修好通商条約調印。 ６月、松平忠固、老中を罷免される。 ９月、安政の大獄始まる。
安政６	１８５９	２９	４月、長崎海軍伝習所の廃止に伴い、長崎から江戸に帰る。	９月、松平忠固死去。

万延元	１８６０	３０	咸臨丸に乗船を希望するもかなわず。 ３月、養父赤松弘没し、赤松家を継ぐ。	１月、咸臨丸、浦賀出発。 ３月、桜田門外の変。
文久元	１８６１	３１	１０月、小三郎に改名する。	
文久２	１８６２	３２	７月、上田藩で、調練調方御用掛を命じられる。	１月、坂下門外の変。 ８月、生麦事件。
文久３	１８６３	３３	春、松代藩士の娘、たかと結婚する。 ４月、佐久間象山と松代で初めて会談、以後、象山と交流する。 上田藩に藩政改革意見書を提出する。	５月、長州藩、下関で外国船を砲撃。 ７月、薩英戦争。 ８月１８日の政変。
元治元	１８６４	３４	７月、佐久間象山、京都で暗殺される。 １１月、江戸から横浜のイギリス公使館付武官アプリン大尉等を訪ね、英語やイギリス兵学等を学ぶ（元治２年３月まで）。	７月、蛤御門の変。 ８月、４国連合艦隊下関砲撃。 ７月～１２月第一次長州征討。
慶応元	１８６５	３５	２月、下曽根信敦塾に再入門する。 ４月、「１８６２年施條銃式英国歩兵練法」の翻訳を始める。	
慶応２	１８６６	３６	３月、下曽根稽古場蔵版として、「１８６２年施條銃式英国歩兵練法」（５編８冊）を出版する（浅津富之助と共訳）。 ８月、幕府へ、長州征討を批判し、有能な人材の登用、兵制の改革刷新等を求める建白書を提出する。 ９月、上田藩主へ、人材の登用、言論の自由、藩主自身の取るべき姿勢等について建白書を提出する。 １０月、京都で、江戸へ出立直前の、勝海舟を訪ねる。京都衣棚で兵法塾を開き、英国式兵法教授などを行う。後、薩摩藩邸に招かれて、兵法教授、調練等を行い、会津藩でも調練等を行う。 １１月、幕府、上田藩に、小三郎の開成所教官兼海陸軍兵書取調役採用を打診する。 １２月、上田藩、幕府の小三郎採用を断わる。	１月、薩長盟約。 ６月～８月、第二次長州征討。 ７月、将軍家茂急死。 福沢諭吉、「西洋事情」を出版。 １２月、徳川慶喜、将軍就任。 １２月、孝明天皇急死。

慶応３	１８６７	３７	５月、薩摩藩からの依頼により「薩摩蔵版重訂英国歩兵練法」（７編９冊）を刊行する。 ５月～　幕府、越前藩松平春嶽（前幕府政事総裁職）、薩摩藩島津久光等に議会政治等を提唱する建白書（「建白七策」）を提出する。 ８月頃、幕府と薩摩藩の間を取り持つ（「幕薩一和」）ため、西郷隆盛、若年寄永井尚志らと談合する。 ８月末、上田藩の命により、いったん帰藩する決意をする。 ９月３日、京都５条東洞院魚棚下ルにおいて、薩摩藩士中村半次郎（桐野利秋）らによって暗殺される。	１月、明治天皇践祚。 ５月、四侯会議。 ６月、薩土盟約締結。 ８月、薩摩藩武力討幕派、長州との挙兵計画を策定。 ９月、薩摩藩、土佐藩との盟約を破棄。
（参考）				
明治３９	１９０６		５月、小三郎の弟子であった東郷平八郎大将と上村彦之丞中将は、伊東祐亨元帥とともに上田を訪問し、小三郎の霊位に弔祭料を供えた。	
大正１３	１９２４		従五位を追贈された。	

「赤松小三郎研究会」入会のご案内

２０２４年１１月４日
赤松小三郎研究会
（上田高校関東同窓会）

当研究会は、赤松小三郎や幕末史に関心をお持ちの皆さまのご入会を心からお待ちしております。上田高校同窓生の皆さまに限らず、どなたでも入会大歓迎です。次ページの入会申込書をご利用ください。

（幕末の上田藩士、赤松小三郎）

幕末の上田藩士、赤松小三郎は、京都の薩摩藩邸や会津藩邸などで西洋兵学などを教え、東郷平八郎はじめ多くの英才を育てました。

また、普通選挙を採り入れた議会制度の創設などを含む、わが国近代化のための先進的な憲法構想（「建白七策」）を起草し、前政事総裁職の松平春嶽、薩摩藩国父の島津久光など政局のキーマンや幕府にその実現を働きかけるなど、新しい政治・社会体制への移行を平和裏に実現するために、全力を尽くしました。

しかし、慶応３年（１８６７年）９月３日、３７歳で、弟子の中村半次郎（桐野利秋）など薩摩藩士によって暗殺されました。

赤松小三郎の優れた洋学の教え、先進的な政治構想、そして新しい政治・社会体制への移行を平和裏に実現するための活動は、日本の近代化に大きな役割を果たしました。

しかし、小三郎の事績については、志半ばで暗殺されたこともあり、これまで十分な歴史的評価が行われてきたとは言い難い状況にあります。

（研究会の設立目的とこれまでの活動概要）

赤松小三郎研究会は、このような状況を踏まえ、赤松小三郎の事績を明らかにし、歴史的な再評価を実現するとともに、広く幕末史への理解を深めることなどを目的として、２０１３年８月、上田高校関東同窓会の同好会として設立されました。

この間、多くの皆さまのご支援をいただきながら、１０回の講演会を含め、４０回を超える会合を重ねるなどの活動を続けてまいりました。

（研究会例会の活動内容）

当研究会の例会は、原則として、偶数月の第２土曜日、午後２時から２時間程度開催されており（会費は実費５００円程度）、毎回、２０名程度が出席しています。

例会では、研究会会員や有識者から、赤松小三郎や幕末史などに関するさま

ざまなテーマについて調査、研究などの成果が発表され、この発表を基に活発な意見交換が行われています。これらの活動の概要は、毎回、赤松小三郎研究会のホームページ（上田高校関東同窓会ホームページ）において、公開しております。　赤松小三郎研究会

また、赤松小三郎研究会では、これらの活動と合わせて、佐野鼎研究会、幕末史研究会、万延元年遣米使節子孫の会、咸臨丸子孫の会、勝海舟の会など他の研究会などとの交流も活発に行っております。

（入会のお誘い）

赤松小三郎研究会では、研究活動のいっそうの充実・強化のため、赤松小三郎はじめ幕末史に関心をお持ちの皆さまに、当研究会に是非ともご入会いただきたいと念願しております。

この研究会には、上田高校同窓生に限らず、赤松小三郎や幕末史に関心をお持ちの方であれば、どなたでも入会を大歓迎いたします。

（入会のお申込み・お問い合わせ）

当研究会への入会をご希望の方は、下記入会申込書に、入会金１０００円を添えて、お申し込みくださいますよう、お願い申し上げます（会場入口で受付を行っております）。

また、入会や活動状況等についてのお問い合わせは、下記あてお願い申し上げます。

赤松小三郎研究会事務局
Ｅメール：oosakajou@msn.com

（切り取ってご提出ください。）

赤松小三郎研究会入会申込書

入会金1000円を添えて、次のとおり入会を申し込みます。

2024年　月　日

お名前　　：　　（上田高校卒業生の場合　期）
お電話番号　：
メールアドレス：
ご住所　　：

「赤松小三郎研究会」最近の活動概要

（２０２３年１１月２６日～２０２４年１０月１２日）

各回の詳しい内容は、赤松小三郎研究会ホームページ（上田高等学校関東同窓会ホームページ）をご参照ください。　赤松小三郎研究会

第４８回赤松小三郎研究会

日時：２０２４年１０月１２日（土）午後１時～４時３０分

○　第２回幕末史特別講演

講師：榎本隆一郎氏（榎本武揚玄孫）

演題：「子孫が語る榎本武揚」

ポイント：

・　榎本武揚の子孫として、私的なエピソードも交えながら、お話ししたい。

（修業時代）

・　榎本武揚、１８３６年、幕臣の次男として江戸に生まれる。

・　１８４７年に入学した昌平黌では最低の成績であったが、二期生として入学した長崎海軍伝習所では名指しで褒められるほどの好成績であった。

・　１８６２年、オランダ留学に出発したが、途中嵐に会い、無人島に漂着、海賊から船を奪って脱出した。

・　オランダでは、船舶運用術、砲術、蒸気機関学、化学、国際法を学んだが、学業に限らず、海外の文化・風習にも触れ、グローバルな観点を手に入れた。

・　１８６７年、オランダに発注した開陽丸が完成し、同船で横浜港に帰着。

（戊辰戦争・蝦夷地へ）

・　１８６８年の鳥羽伏見の戦いでは、阿波沖海戦で勝利したが、慶喜は大坂城を脱出。榎本は徹底抗戦を主張したが、慶喜の受け入れるところにならず。

・　同年８月、榎本は、江戸を脱出、奥羽地方を経由し、蝦夷地へ向かう。途中嵐に遭い、美加保丸が座礁・沈没。

・　同年１０月、鷲の木（現森町）に上陸し、五稜郭を占拠。松前藩を艦砲射撃。新政府樹立を宣言した。

・　１８６９年、函館戦争を戦うが、開陽丸を座礁のため失い、敗戦。

・　榎本は、降伏勧告を拒否する回答状とともに、自分が大事にしていたオルトランの「海律全書」を、戦火での焼失を避けるため、黒田清隆に贈った。

・　榎本は、責任を取って自刃しようとしたが、近習の大塚霍之丞に制止された。

（収監・出獄）

・　同年６月、榎本らは、唐丸籠で護送され、辰の口の兵部省軍務局糾問所の牢獄に入った。

・　福沢諭吉や黒田清隆の助命嘆願運動もあって、１８７２年１月、特赦により出獄し、３月放免となった。

（蝦夷地開拓）

・　同年４月、蝦夷開拓使（四等出仕で知事と同等）となり、豊富な地下資源を活かすため、小樽港を開発。

（大使・大臣就任）

・　１８７４年、駐露特命全権大使に任ぜられ、「樺太・千島交換条約」の締結に尽力する。

・　以後、初代逓信大臣（郵便マーク）、文部大臣、外務大臣（メキシコ植民）、農商務大臣（足尾銅山事件）等を歴任する。

（やせ我慢の説）

・　福沢諭吉から、「痩我慢の説」で、勝海舟とともに、批判を受けたが、返答せず。

（東京農業大学の創設等に尽力）

・　徳川育英会の設立、東京農業大学の創設に尽力した。

・　工業化学会・電気学会など様々な学会の会長・会頭も務めた。

（晩年）

・　６０歳を過ぎて、毎日1升酒。勝海舟、伊藤博文らと交流した。

・　１９０８年、腎臓病で死去。海軍葬

○　<u>八木剛助と赤松小三郎の関係―エピソード・０・＋」（発表）</u>

発表者：八木晴之氏

ポイント：

（エピソード・０）

・　八木剛助の孫輿一郎は、上田高等女学校校長を務めた。

・　輿一郎の子博（正風）は、東京美術学校に進み、昭和１４年、同郷の名士滝澤七郎氏の依頼で、赤松小三郎の肖像画を描いた。

（エピソード・＋）

・　戦時中、八木剛助は、日本軍の軍事史研究で偉大な「日本主義」兵学家と神格化された。（「日本主義」は、明治政府の極端な欧化主義に反動して生まれた考えであり、昭和になると、皇国史観が強調され、右翼活動家や日本軍人たちに強く支持されて、軍国主義と結びついた）

・　このような間違い評価は、陸軍士官学校の教授が、剛助の初期著作「兵学啓蒙」を「日本精神に徹底した偉大な兵学者の名著」と記述し、これを鵜呑みにした柴﨑新一氏が、「上田郷友会報」で剛介を「日本主義兵学家　八木剛助先生」と祭り上げ発表したことによる。

・　「兵学啓蒙」は、剛助の初期の著作で、後年の「兵学筌蹄」とは正反対で「実践に則さない若気の空論」であったが、戦時中は剛介の評価として定着してしまった。
・　戦後、上田市立博物館発行の「上田藩の人物と文化」、「上田市史」（人物編）等で、剛助が紹介され、復権が進んだ。

○　赤松小三郎の建白七策と「薩土盟約」（発表）

発表者：滝澤　進氏

ポイント：

・　「薩土盟約」は、「大政奉還建白」から「大政奉還」に至る幕末史の流れを決定づけた重要なできごとの１つであった。
・　赤松小三郎の「建白七策」（慶応３年（１８６７）５月）と「薩土盟約」（同年６月）は、ともに、幕府と薩長等との武力衝突を回避し、平和裏に近代的な政体への体制移行を図ろうとする、基本的な考え方を同じくするものであり、かつ、具体的な提言内容も重なる部分が多い。
・　これまでの識者の諸評価からも、「建白七策」が「薩土盟約」の締結に大きな影響を与えたものと考えられる。

（「薩土盟約」の締結）

・　慶応３年（１９６７）６月２２日、後藤象次郎の主導により、土佐藩士（寺村左膳、後藤象二郎ら）と薩摩藩士（小松帯刀、西郷隆盛ら）が会合し、坂本龍馬、中岡慎太郎立会いの下に、「政権の徳川家から朝廷への返還」と「二院制の議会（下院議員は普通選挙）の設立」の２点を骨子とする「薩土盟約」を結ぶことを決定した。
・　この盟約による議会は、英国流の議会制度にならい、「皇国の制度法則一切万機」の議決権を有するものであり、当時の多くの議会制度論とは異なるものであった。

（「薩土盟約」の解消）

・　その後、土佐藩が、山内容堂の指示により、「大政奉還建白書」から「将軍辞職条項」を削除することとしたことなどから、慶応３年（１８６７）９月９日、「薩土盟約」は、薩摩藩の変約により、解消された。他方、薩摩藩は、９月８日、薩長芸三藩による共同出兵計画を策定した。

（大政奉還建白書の提出）

・　慶応３年（１８６７）９月２０日、幕府若年寄の永井尚志は、後藤象次郎に、建白書の提出を促した。
・　土佐藩は、これを受けて、１０月３日、薩摩藩の事前の同意を得た上で、幕府に「大政奉還建白書」を提出した。

・　その内容は、「薩土盟約」から「将軍辞職条項」を除き、教育の振興に関する項目を加えたものであった。

○　１１月４日の「赤松小三郎講演会」について（報告）

報告者：関良基氏（荻原貴氏代読）

概要：１１月４日の「赤松小三郎講演会」の進め方についての説明があった。

○　上田高校松尾祭（７月７日）のでの講演会について（報告）

報告者：関良基氏（荻原貴氏代読）

概要：７月７日に行われた上田高校松尾祭での報告者による講演会（同校郷土班主催）について、市民、高校生、先生方等９０名近い参加があり、赤松小三郎や松平忠固への関心が急速に高まっている様子が窺えた、などの報告があった。

○　「万延元年遣米使節子孫の会」での講演の報告

報告者：滝澤　進氏

概要：「万延元年遣米使節子孫の会」での報告者による講演（８月２３日　オンライン）についての報告があった。

○　赤松小三郎研究会役員の変更

報告者：滝澤　進会長

概要：次のとおり赤松小三郎研究会役員が変更されたとの報告があった。

事務局長　退任　小山平六氏
　　新任　荻原貴氏
事務局　：新任　西澤澄雄氏
運営委員：退任　石川浩氏
　　新任　八木晴之氏

第４７回赤松小三郎研究会

日時：２０２４年６月８日（土）午後２時～４時３０分

○　江戸の儒教と憲法構想～赤松小三郎らの建白書の背後に儒教はあったのか。

発表者：関　良基氏

ポイント：

（問題意識）

・　戦後歴史学の定説は、「『政府』についても『議会』についても明確な規定のなかった幕末の『公議会論』には新政治体制を創設する力がなかったのは当然で、『新政府』の性格は、旧幕府軍と薩長軍が鳥羽伏見で一戦してみて決めるしかなかった」とする。（坂野潤治「未完の明治維新」）

・　これに対し、尾佐竹猛は、「議会設置と大政奉還とは不可分の条件であった。しかし、薩長が『武力倒幕を為さん』と企図、ついに鳥羽伏見の戦争の勃発に至

り、『砲烟、鳥羽伏見の窓を蔽ふて議会論は烟の如く消へ去った』」とする。
（「維新前後に於ける立憲思想」）

（江戸の憲法構想）

・　ジョセフ・ヒコ、赤松小三郎、津田真道、西周、松平乗漠、山本覚馬等の優れた構想があり、明治維新以外に、近代に向かう多様な可能性があった。

（再評価される朱子学）

・　近年、朱子学は再評価されつつある。

（丸山眞男の朱子学批判）

・　幕末の儒学に関しては、保守的な体制教学であり、前近代的な封建思想であったとする理解が、丸山眞男以来の定説となった。

・　丸山は、江戸時代を封建教学である朱子学の崩壊過程ととらえ、朱子学批判によって作為的に現状を変えようとする吉田松陰、さらには福沢諭吉などの近代的な個人が出現し、近代的思惟は開花したと論じている。

（朱子学は近代化の阻害物だったのか）

・　佐久間象山は、朱子学は近代科学と共存可能とし、横井小楠や中村正直も、それぞれの立場から、朱子学を評価している。

（儒教の人権論は西洋の人権論を補完する）

・　西洋の人権概念は、個人に干渉しない政府が良い政府とするものであるが、朱子学では国家にプラス行為をさせる論理であり、福祉と教育を充実させるための国家の機能は否定されない。

（なぜ戦後歴史学は幕末議会論を低く評価したのか）

・　マルクス主義者たちは、山内容堂の議会政治論を過小評価し、平和革命はまやかしであり、戊辰戦争によって武力で徳川軍を粉砕する必要があったとする。

（山内容堂は大政奉還に当たって赤松建白書を参考にしていた？）

・　薩土盟約・大政奉還建白書・赤松小三郎「建白書」には、多くの共通項があった。

（現行憲法の基本的人権は、慶応４年既にその必要性が指摘されていた）

・　加藤弘之が、「立憲政体略」を、何を種本として書いたのかは明らかではないが、生存権や職業選択の自由の優先順位を高くしているのは、儒教的素養が背景にあったからではないか。

・　「立憲政体略」では、「国憲」に書き込まれるべき最小限の基本的人権を掲げており、現行憲法の基本的人権は、慶応４年にその必要性が指摘されていた。

（福澤諭吉の儒教批判と渋沢栄一の儒教評価）

・　福澤諭吉は江戸を否定し西洋近代化を受容し、渋沢は江戸の儒教ベースの近代化を目指した。

（結論）

・　江戸の儒教的伝統から人間の個性・福祉・教育を重視する近代国家は生まれたはず。

（なぜ戦後歴史学において幕末議会論が無視されてきたのか？）

・　次の虚構を否定しない限り、赤松小三郎の復権はできない。

①　「幕末議会論」は西洋思想だけの受け売りだった。

②　「幕末議会論」の実態は、未熟な封建議会論だった。

③　徳川の体制イデオロギーである朱子学は、封建教学で近代を準備できなかった。

○　<u>赤松小三郎の歴史的な評価に向けて（現状と課題）（発表）</u>

発表者：滝澤　進氏

概要：

・　赤松小三郎の歴史的な再評価のためには、小三郎の事績、近代化に果たした役割等についての周知活動を、関係者が力を合せ、様々な機会を通じて、展開していく必要があるとして、次の諸点についての説明があった。

①　「明治以降の歴史的な再評価に向けてのできごと・取組み状況」

②　「顕彰・研究活動等の概況」

③　「今後の課題等」

第４６回赤松小三郎研究会

日時：２０２４年４月１３日（土）午後２時～４時４５分

○　<u>仮想　天才赤松小三郎を育んだ八木剛助（発表）</u>

発表者：八木晴之氏

ポイント：

・　赤松小三郎が才能を発揮し、万能の天才になり得たキーパーソンの１人が、西洋砲術の先達で、蘭学に造詣の深い八木剛助ではなかったかとの仮想。

・　八木剛介（１８０１年生まれ）は、芦田清次郎（赤松小三郎）の従兄弟叔父（いとこおじ）で、剛助の母須恵は、清次郎の大叔母に当たり、両家は、親戚関係にあった（発表者は、八木剛助の玄孫で、父八木博（正風）は、赤松小三郎の肖像画を描いた画家としても知られる）。

・　八木家、芦田家は、ともに丹後出石時代からの松平家の家臣で、９石３人扶持前後の下級藩士であった。

・　１８４４年、剛助は、４３歳で、藩命により、西洋砲術研究のため、田原藩村上定平に入門、帰国後「田原記聞」を著わす。帰国翌年には、上田で大砲鋳造に着手。後に、江戸で、幕府より高島流砲術世話方を命じられる。

・　剛助は、１８５０年、４９歳で江戸で佐久間象山に入門。翌年、長男数馬も同

塾に入門。この頃、清次郎は内田弥太郎塾（後に下曽根金三郎塾も）、兄柔太郎は昌平坂学問所に学んでおり、江戸で八木家と芦田家の家族が頻繁に交流していたものと想定。

・　１８５８年、剛助は、「兵学筌蹄（せんてい）」を完成、藩主の出版許可を得て、林大学頭に提出。将軍家茂から、藩主忠固は「上田藩に良き軍師あり」との言葉を受ける。この書は、幕府陸軍の創設の一助となるが、単なる兵学書ではなく、財政改革、開港通商、産業振興等に及ぶ日本の将来を論じたもの。

・　１８６０年、剛助、５９歳で武芸頭取・軍学師範・砲術師範兼務となり、藩は西洋流縦隊調練を進めるため、小三郎ら若手を起用（１８６２年、小三郎は調練調方御用掛）。

・　１８６３年、小三郎、象山と交流。藩政改革意見書を提出。

・　１８６４年～６６年、剛助、兼助、小三郎の３人は、長州征討で、江戸、大坂に出た機会に交流した可能性がある。

・　小三郎は、１８６６年「英国歩兵練法」を翻訳出版し、各藩に注目される。同年１０月頃、京都で開塾。

・　１８６７年、小三郎は、松平春嶽、島津久光らに、「建白七策」を提出。「幕薩一和」で西郷らと談合。９月、京都から帰国直前、暗殺。

・　戊辰戦争では、上田藩は、剛助の意見で、官軍へと導き、上田を戦火から守った。

・　剛助は、小三郎の暗殺、兼助（養子）の戦死の後、７０歳で死去。

○幕末の薩摩藩と庄内藩の密接な関係→戊辰戦争の賞罰関係に影響を与えた（発表）

発表者：沓掛　忠氏

ポイント：

・　戊辰戦争の戦死者は、庄内藩では５３名（うち庄内藩内での戦死者は２３名）と、他藩に比べて非常に少なかったが、薩摩藩と庄内藩との特別な関係があったことがその要因として考えられる。

（本間軍兵衛）

・　庄内藩の本間家分家の本間軍兵衛は、グラバーの推薦により薩摩藩開成学校の英語教師となり、「薩州商社案」を作り、小松帯刀に上申した。軍兵衛は、若手群像に英語教育を与えた人物として、薩摩の近代化に尽くした。

（岩元源衛門）

・　第８代藩主島津重豪は、商業を盛んにするため、優秀な商人を全国から募集したが、これに応募した庄内藩の岩元源衛門が、鹿児島城下に移住して、呉服店を開業した。

・　源衛門は、薩摩産品の全国での販売や北前船を活用しての蝦夷地のコンブの販

売などで莫大な利益を生み出し、薩摩藩は、一躍とびぬけて財政力の豊かな藩となった。また、薩摩藩は、沖縄を経由しての密貿易にも手を染めていた。

・　薩摩藩は、こうした資金を元手に、上海から１万丁規模の最新式の小銃や大量の弾薬と装備を買い付けるなど、幕末の激動期に備えて密かに準備していた。

（戊辰戦争と庄内藩）

・　戊辰戦争で、新政府軍は、庄内藩に軍を差し向け、庄内藩は、「清川の戦い」で撃退されたが、最後は結局、無敗のまま降伏した。

・　戦い後の処分では、庄内藩は、会津藩や長岡藩と比較し、大変軽い処分にとどまったが、これは、薩摩藩が豊かになったのは庄内出身の岩元源衛門のおかげであることを十分知悉していた西郷隆盛が、「庄内藩を潰すぐらいなら、おいどんを殺してくれ」と発言したことによるものであった。

○　２０２４年第１１回赤松小三郎講演会について（報告）

報告者：関良基氏

概要：第１１回赤松小三郎講演会の日程、講師、パネリスト等についての報告があった。

○　「英雄たちの選択」と赤松小三郎「博覧会で京都を救え～八重の兄山本覚馬～（報告）

報告者：滝澤進氏

概要：３月２７日放送のＮＨＫＢＳ「英雄たちの選択」について概要の報告があった。

第４５回赤松小三郎研究会

日時：２０２４年２月１０日（土）午後２時～４時３０分

○　第１０回赤松小三郎講演会について（報告）

報告者：西澤澄雄氏

概要：第１０回赤松小三郎講演会の概要についての報告があった（本資料１０ページの講演会報告参照）。

○　赤松小三郎と佐久間象山たち（発表）

発表者：芦田勇樹氏

ポイント：

・　赤松小三郎関係者の中に、象山グループ（佐久間象山と象山関係者）が複数いることが確認できる。

・　仮説として、赤松は西洋砲術をはじめとした洋学を学んでおり、象山・象山関係者も、赤松の思想や活動に少なからぬ影響を与えている、と考えても良いのではないか。

・　象山は、公武合体による幕府権力強化によって国家を富強し、外圧に対抗するというのが基本的態度で、政治的・社会的秩序の保持は、科学技術を受容して国家の独立を保つという命題とセットであり、赤松との類似性が見て取れる。
・　八木木剛助は、赤松が上田で働いていたころ、ともに政治活動に力を入れたキーパーソンである可能性がある。
・　赤松は、数学者、兵学者としてスタートし、「兵学者」として「象山グループ」と関わっていることが多く、また、政治思想家として活動を始めるきっかけや思想にも、「象山グループ」が関わっている可能性がある。

○．赤松小三郎研究会設立１０周年記念事業等の実施状況（報告）

報告者：滝澤進会長

概要：設立１０周年記念事業等の実施状況について、説明があった。

(1)　ホームページの立ち上げ～昨年１２月より上田高校関東同窓会ホームペー ジ上で情報発信中。赤松小三郎研究会

(2)　赤松小三郎研究会設立１０周年記念講演会の開催（2023．11．26（土））

(3)　赤松小三郎研究会設立１０周年記念エッセイ賞の募集・表彰

(4)　赤松小三郎研究会例会における幕末史特別公演の開催（2023．10．14 ）

(5)　マスメディアを通じての情報発信（検討中）

(6)　赤松小三郎研究会設立10周年記念誌の編集（検討中）

○「赤松小三郎エッセイ賞」について（報告）

報告者：荻原貴氏

概要：全国から22作品の応募があり、応募者の年齢は7歳から86歳まで幅広い年代であった。2023年11月26日に開催された第10回赤松小三郎講演会の終了後、受賞者 の表彰が行われた。募集趣旨である「赤松小三郎について幅広い関心を高めるとともに、その事績の理解に寄与する」ことに貢献できた。

第１０回赤松小三郎講演会

日時：２０２３年１１月２６日（土）午後２時～４時４０分

演題：　幕末政治と赤松小三郎

講師：町田明広氏（神田外語大学教授）

ポイント：

（赤松小三郎の人物像の再点検）

赤松小三郎は、歴史に埋もれた人物の典型的な例であり、赤松小三郎の人物像を先行研究に留意しながら再度点検し、その事績を検証しながら、幕末政治史の中で位置づける必要がある。

赤松は、今でいう文系、理系両方ができる人で、万能の天才に近いところがあった。

（軍事戦略家の側面からの評価）

赤松小三郎を、「建白七策」の先見的な内容からアプローチし過ぎることを避け、まずは英式兵学を我が国に最初にもたらした軍事戦略家の側面を高く評価すべきであり、軍事史学における赤松の再評価を期待する。

「英国歩兵練法」は、イギリス式の兵学の日本における最初の公的な存在であり、赤松が軍事戦略家としてトップランナーだった証左である。

（「建白七策」）

「建白七策」は、譜代小藩の上田藩士であるため幕府を排除できず、幕府と西国雄藩の連携、特に幕薩融和を意識し、四侯会議に合わせて建白した。

こうした構想を日本で初めて明文化したことが極めて重要であり、このタイミングで建白した政治的センスに重きを置くべき事象と位置づける

幕府あての「建白七策」は、１１月に盛岡藩が入手しており、相当広い範囲に流布していたことは間違いないだろう。

（「幕薩一和」運動）

「幕薩一和」運動は、幕末政治における画期的な事象であり、実は形を変えて、大政奉還運動に連動し、更には大政奉還後の小松帯刀や坂本龍馬による政体構想に接続したのではないかと考える。この周旋活動は、幕末政治史における極めて重要なものと判断する。

（赤松小三郎の暗殺）

赤松小三郎の非業の死は、日本軍事史において痛恨事であるとともに、政治史においても有能なインストラクチャーを喪失したと断言しても過大評価にはならないと確信する。

赤松小三郎講演会のご案内

2024年
11月4日
(月・振替休日)

赤松小三郎
上田市立博物館蔵

演　題　「赤松小三郎から見た江戸時代」
講　師　　田中優子氏（前法政大学総長）

幕末、信州上田藩士 赤松小三郎は、二院制議会を含む先進的な憲法草案（グランドデザイン）を起草し、その実現に努力するとともに、京都で開いた洋学塾などで多くの英才を育てました。

第一部　基調講演(14:10～15:15)

「赤松小三郎から見た江戸時代」

講師 田中優子氏（前法政大学総長）

横浜市生まれ。1980年法政大学大学院博士課程修了（日本文学専攻）。法政大学社会学部教授。2014～21年まで法政大学総長。
現在、同大学名誉教授、同大学江戸東京研究センター特任教授。
主な著書:『江戸の想像力』1986年、『江戸百夢』2000年、『布のちから 江戸から現代へ』2010年、『グローバリゼーションの中の江戸』2012年、『遊廓と日本人』2021年、他多数。

講師からひとこと

江戸時代には幕末に約270の藩があった。ほとんどの人々はその中の集落（村）に暮らしていた。村に「村長」はいなかった。

庄屋（名主）、組頭、百姓代の３人体制だった。彼らに住民の意見を伝えるための組織は「寄り合い」つまり議会である。寄り合いは合議に至るまで徹底的に話し合う機関であったが、決まらなければ入札（選挙）が行われた。村には、日々の仕事を行うために年齢や性別や機能によって「組」「衆」「講」「結」など少数の組織が組まれており、そこで互いに決めることも、重要な役割をした。江戸時代には頻繁に「一揆」が起きたが、これは参加者全員が署名し、要求を文書化し、それを相手に渡す、という手順が決まっていた。

この250年間続いた方法を、近代民主主義に活かせたはずである。幕末に赤松小三郎などが提案したことは、天皇制中央集権ではない別の道を開いた可能性がある。学校制度も含め、西欧のやり方に合わせるのではない日本を、改めて考えてみたいと思う。

第二部　パネルディスカッション(15:30～16:30)

「赤松小三郎と江戸の民主主義」

パネリスト 田中優子氏（前法政大学総長）　関良基氏（拓殖大学教授）　橋本真吾氏（北里大学講師）

幕末の騒乱期、欧米の民主主義思想は、当時の知識人たちにどのように受容されていったのかを提起し、それが江戸時代の「寄り合い」や全員一致の村落社会の伝統と接合する可能性があったのではないかという点を探ります。そして、赤松小三郎は異端児として、時勢から孤立して議会制度を叫んでいたわけではなく、日本独自の民主主義を生み出した可能性をパネル討論します。

関良基氏（拓殖大学教授）
1969年信州上田生まれ。京都大学大学院農学研究科博士課程修了。博士(農学)。
主な著書に『社会的共通資本としての森』(宇沢弘文氏との共著、東京大学出版会)『赤松小三郎ともう一つの明治維新』『江戸の憲法構想』(作品社)など。

橋本真吾氏（北里大学講師）
1987年東京都生まれ。東京工業大学大学院社会理工学研究科博士課程修了。博士(学術)。著書に『近世後期日本における対米観の形成と展開』(2024)。
江戸時代に生まれた「共和」という言葉の源流など、民主主義概念の形成過程を研究している。

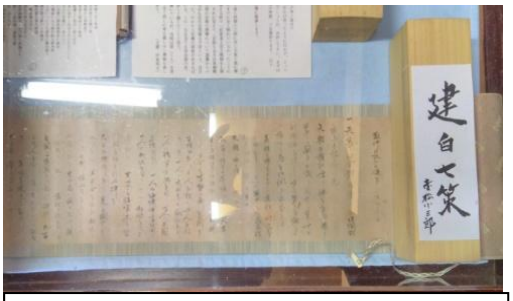
日　時；2024年11月4日(月 振替休日) 講演14:00～16:30(受付開始13:30)
会　場；日比谷図書文化館　地下1階コンベンションホール(裏面案内図ご参照)
参加費　；1,000円(当日会場受付にて申し受けます)
定　員　；200名(先着順　お早めにお申し込みください)

お申込は

赤松小三郎研究会事務局（Eメールで事前のお申し込みをお願いいたします）
Eメール：oosakajou@msn.com
(お名前、ご住所、本講演会をお知りになったきっかけなどご記入ください)
(提供いただく個人情報は講演会の案内などの目的で適正に取扱うとともに、目的外利用はいたしません)

主催　上田高等学校関東同窓会赤松小三郎研究会

赤松小三郎【天保2年（1831年）～慶応3年（1867年）】



建白書複製（赤松小三郎記念館）
原資料は鹿児島県歴史史料センター黎明館蔵

幕末の信州上田藩士。江戸に出て内田弥太郎、下曽根金三郎に師事し、数学、天文、測量、暦学、蘭学、砲術を学ぶ。その後勝海舟に入門し、その供侍として長崎海軍伝習所で航海術などを学ぶ。さらに横浜で英国士官アプリンから英語、英国兵法などを習う。

幕末の京都で開いた私塾や薩摩藩邸、会津藩邸で洋式兵学を教えた。諸藩より学ぶ門下生の数、８００余名。その中には東郷平八郎元帥、上村彦之丞大将など日清、日露戦争で活躍した諸将が含まれる。薩摩藩島津久光侯の委嘱により「重訂　英国歩兵練法」を翻訳した。

慶応３年５月、前政事総裁職（前福井藩主）の松平春嶽侯、島津久光侯及び幕府に建言した「建白七策」は、今後の政体構想と国家のグランドデザインを描いたもので、政治史のなかで輝いている。

天幕一和、諸藩一和のもと上下二局の議政局により内憂外患のこの時期を乗り切る方策を模索し、西郷隆盛や徳川慶喜への働きかけを行うなど、最後まで東奔西走したが、明治維新直前の慶応３年９月、京都において弟子の薩摩藩士桐野利秋らにより暗殺された。享年３７。

上田市（上田城跡公園内）に赤松小三郎記念館がある。

■会場のご案内

〒100-0012
東京都千代田区日比谷公園 1-4
日比谷図書文化館（地下１階）
日比谷コンベンションホール
（大ホール）（旧　日比谷図書館）

都営地下鉄●三田線「内幸町駅」A７出口／徒歩3分
東京メトロ
●丸の内線●日比谷線「霞ケ関駅」B２出口／徒歩3分
●千代田線「霞ケ関駅」C４出口／徒歩3分
ＪＲ「新橋駅」日比谷口（ＳＬ広場）徒歩10分
※当施設に駐車場・駐輪場はございません。公共交通機関をご利用下さい。